



TITLE:

京大広報 No. 545

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 545. 京大広報 2000, 545: 851-866

ISSUE DATE:

2000-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196564>

RIGHT:



京大広報

No. 545

2000 4



春・ほのぼのコンサート 関連記事本文866ページ

目次

大学の動き

副学長の再任852

部局長の交替等852

部局の動き

エネルギー理工学研究所プラズマ実験装置
(ヘリオトロン)完成報告会854

事務局消防訓練854

医療技術短期大学の動き

医療技術短期大学部長の交替855

日誌855

訃報855

随想

ガラス今昔：光を生かすガラス
名誉教授 作花濟夫857

資料

平成11年度京都大学後援会
助成金交付決定者一覧859

公開講座

京都大学春秋講義(春季講座).....864

終了報告

教育学研究科附属臨床教育実践研究センター

第3回リカレント教育講座

「心の教育」を考える

不登校・学級崩壊の心理臨床から865

話題

長尾総長が課外活動団体を激励865

京大病院で『春・ほのぼのコンサート』を

開催866

お知らせ

財団法人京都大学後援会の

寄附行為の一部改正866

大学の動き

副学長の再任

副学長

宮崎 昭農学研究科教授（応用生物科学専攻動物機能開発学講座担当）が、4月9日副学長に再任された。任期は平成13年3月31日までである。

副学長

赤岡 功経済学研究科教授（組織経営分析専攻経営・社会環境分析講座担当）が、4月1日副学長に再任された。任期は平成13年12月15日までである。

部局長の交替等 （新任）

附属図書館長

菊池光造附属図書館長の任期満了に伴い、その後任として佐々木丞平文学研究科教授（思想文化学専攻美学・美術史学講座担当）が、4月1日同館長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。



アジア・アフリカ地域研究研究科長

坪内良博アジア・アフリカ地域研究研究科長の任期満了に伴い、その後任として田中二郎アジア・アフリカ地域研究研究科教授（アフリカ地域研究専攻民族共生論講座担当）が、4月9日同研究科長に任命された。任期は平成14年4月8日までである。



文学研究科長・文学部長

興膳 宏文学研究科長・文学部長の任期満了に伴い、その後任として礪波 護文学研究科教授（歴史文化学専攻東洋史学講座担当）が、4月1日同研究科長・同学部長に任命された。任期は平成13年3月31日までである。



化学研究所長

杉浦幸雄化学研究所長の任期満了に伴い、その後任として玉尾皓平化学研究所教授（有機合成基礎研究部門担当）が、4月1日同研究所長に任命された。任期は平成14年3月31日までである。



経済学研究科長・経済学部長

西村周三経済学研究科長・経済学部長の任期満了に伴い、その後任として本山美彦経済学研究科教授（経済動態分析専攻比較制度・政策講座担当）が、4月1日同研究科長・同学部長に任命された。任期は平成13年3月31日までである。



エネルギー理工学研究所長

井上信幸エネルギー理工学研究所長の任期満了に伴い、その後任として吉川 潔エネルギー理工学研究所教授（エネルギー生成研究部門担当）が、4月1日同研究所長に任命された。任期は平成14年3月31日までである。



宙空電波科学研究センター長

宙空電波科学研究センターの新設に伴い、深尾昌一郎宙空電波科学研究センター教授（電波応用工学研究部門担当）が、4月1日同センター長に任命された。任期は平成14年3月31日までである。

**環境保全センター長**

吉田郷弘環境保全センター長の任期満了に伴い、その後任として竹内賢一工学研究科教授（物質エネルギー化学専攻基礎物質化学講座担当）が、4月1日同センター長に任命された。任期は平成13年3月31日までである。

**（再任）****総合人間学部長**

林 哲介総合人間学部教授（基礎科学科自然構造基礎論講座担当）が、4月1日総合人間学部長に再任された。任期は平成13年3月31日までである。

数理解析研究所長

森 正武数理解析研究所教授（無限解析研究部門担当）が、4月1日数理解析研究所長に再任された。任期は平成13年3月31日までである。

教育学研究科長・教育学部長

竹内 洋教育学研究科教授（教育科学専攻教育社会学講座担当）が、4月1日教育学研究科長・教育学部長に再任された。任期は平成13年3月31日までである。

東南アジア研究センター所長

立本成文東南アジア研究センター教授（社会生態研究部門担当）が、4月1日東南アジア研究センター所長に再任された。任期は平成14年3月31日までである。

情報学研究科長

池田克夫情報学研究科教授（知能情報学専攻知能情報ソフトウェア講座担当）が、4月9日情報学研究科長に再任された。任期は平成13年3月31日までである。

放射性同位元素総合センター長

寺島 泰工学研究科教授（環境工学専攻環境デザイン工学講座担当）が、4月1日放射性同位元素総合センター長に再任された。任期は平成13年3月31日までである。

再生医科学研究所長

山岡義生医学研究科教授（外科系専攻器官外科学講座担当）が、4月9日再生医科学研究所長に再任された。任期は平成14年4月8日までである。

体育指導センター所長

三好郁朗総合人間学部教授（国際文化学科言語文化論講座担当）が、4月1日体育指導センター所長に再任された。任期は平成14年3月31日までである。

生態学研究センター長事務取扱

安部琢哉生態学研究センター教授（生態進化研究部門担当）が、4月1日生態学研究センター長に任命される予定であったが、同教授の急逝により和田英太郎前生態学研究センター長が同センター長事務取扱に任命された。

部局の動き

エネルギー理工学研究所プラズマ実験装置（ヘリオトロンJ）完成報告会

エネルギー理工学研究所附属エネルギー複合機構研究センターでは、プラズマ実験装置（ヘリオトロンJ）完成報告会を3月8日（水）同センター大会議室で開催、学内外関係者約80人が出席した。

報告会では、井上信幸エネルギー理工学研究所長による挨拶の後、大引得弘同研究所附属エネルギー複合機構研究センター長、佐野史道同研究所教授による装置完成の概要報告、清木孝悦文部省学術国際局研究機関課長（小山晴己同局研究機関課国際プロジェクト官代読）、宮崎 昭副学長、藤原正巳核融合科学研究所長（本島 修核融合科学研究所研究総主幹代読）の祝辞があり、続いて多くの方々からの祝電が披露された。

また、報告会に先立って「ヘリカル系プラズマ閉じ込めの改善と展望」と題するシンポジウムが開催された。



装置見学会終了後行われた懇親会では、井上同研究所長の挨拶、太田 充日本原子力研究所那珂研究所長、伊藤靖彦エネルギー科学研究科長からの祝辞の後、西川禎一名誉教授の発声で乾杯し、装置完成を祝って和やかに歓談した。

（エネルギー理工学研究所）

事務局消防訓練

事務局消防計画に基づく事務局職員の防火教育及び消防訓練が、3月8日（水）午後2時から約20分間にわたり左京消防署の指導と協力を得て総勢150人が参加し行われた。

訓練は、消防車2台、屈折車1台が出動し事務局本館1階南側事務室からの出火を想定し、経理部小寺情報企画掛長の「訓練火事です。」との通報により始まり、通報連絡、初期消火、避難誘導、物品搬出、警備誘導、救護等の一連の総合訓練が行われた。

引き続き、左京消防署員の指導のもと起震車乗車体験・消火器放射訓練が行われた。



起震車乗車体験

医療技術短期大学の動き

医療技術短期大学部部長の交替

下野登士男医療技術短期大学部部長の任期満了に伴い、その後任として笹田昌孝医療技術短期大学部教授（衛生技術学科担当）が、4月1日同短期大学部部長に任命された。任期は平成14年3月31日までである。



日誌 2000.2.1 ~ 2.29

2月7日 大韓民国高麗大学 成河珍生命工学院教育学部長来学、総長及び関係教官と懇談
 8日 評議会
 9日 アメリカ合衆国 JoAnne LIVINGSTON 駐大阪・神戸総領事館領事来学、総長及び関係教官と懇談
 14日 エストニア共和国 タルトゥ大学 Jaak AAVIKSOO 学長来学、総長及び関係教官と懇談

16日 国際交流委員会
 22日 評議会
 " 京都大学後援会助成事業検討委員会
 25日 入学者選抜学力試験（前期日程試験）（26日まで）
 29日 安全委員会

訃報

このたび、岡 與志男総合人間学部教授、古川 修名誉教授、岡 道男名誉教授、三木晴夫名誉教授が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

岡 與志男 総合人間学部教授



総合人間学部教授岡 與志男先生は、2月24日逝去された。享年50。

先生は、昭和47年京都大学理学部化学科を卒業、同49年同理学部研究科修士課程修了、同52年同博士課程退学後、本学化学研究所助手を経て、同60年教養部助教授に就任、平成4年総合人間学部助

教授に配置換、同7年総合人間学部教授に就任、物質環境論講座を担当された。

先生の専門は無機固体化学であり、遷移金属硫化物、酸化物の合成と構造に関する研究で数多くの顕著な業績を挙げられた。特に、先生は特異な構造をもつ遷移金属硫化物の相転移観察と理論的解析によってその状態図を決定し、相転移機構を解明された。また、高温超電導酸化物の機械的、熱化学的性質に

ついでの実験的研究からそれら酸化物の効率的合成法を確立された。さらに、水熱合成法をバナジウム酸化物に適用し、一連の新規バナジウム酸化物の合成開発に成功すると同時に、それら酸化物の構造解析からバナジウム原子価と結晶構造との強い相関性を発見された。これらの先駆的研究は、結晶化学の

分野に大いに貢献し、国際的にも高い評価を受けている。

また、先生は学生の教育・研究・指導にも熱心に取り組み、多数の優秀な後進の育成に尽力された。
(総合人間学部)

古川 修 名誉教授



本学名誉教授古川 修先生は、3月2日逝去された。享年74。

先生は、昭和22年東京帝国大学第二工学部建築学科を卒業、建設省建築研究所研究員、同研究所第一研究部長を経て、同49年京都大学工学部教授に就任、建築施工講座を担当された。平成元年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、平成元年4月から同5年3月まで工学院大学工学部教授、同4年10月から同11年3月

まで(財)建築コスト管理システム研究所理事長を務められた。

先生は建築経済、中でも建設産業構造に関する研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、建築生産の分野において多大な貢献をされた。主な著書に『日本の建設業』、『建築経済』、『建築生産システム』等がある。

また、日本建築学会、建設省、労働省などにおいて、各種委員長、理事等の要職を歴任された。

これら一連の功績により、平成2年建設大臣表彰、同5年労働大臣表彰を受けられた。

(大学院工学研究科)

岡 道男 名誉教授



本学名誉教授岡 道男先生は、3月3日逝去された。享年69。

先生は、昭和30年京都大学文学部文学科卒業、同32年同大学院文学研究科修士課程修了、同博士課程を単位取得退学、同37年同志社大学講師、助教授を経て、同44年京都大学文学部助教授、同54年教授に就任、西洋古典語学西洋古典文学講座を担当された。平成6年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、本学評議員として大学の管理運営にも貢献された。また、昭和40年、および同63年の2年間マインツ大学客員教授も務められた。

本学退官後は姫路獨協大学教授に就任、言語教育

研究科長、図書館長を務められた。

先生の研究は、前8世紀のホメロスから後2世紀の白銀時代ラテン文学までを覆うが、とりわけ情熱を傾けられたのは古代叙事詩研究で、『ホメロスにおける伝統の継承と創造』は記念碑的な大著である。『ギリシア悲劇とラテン文学』にはソポクレス研究およびラテン叙事詩・抒情詩・思想研究の精華が収められている。アポロニオス『アルゴナウティカ』の本邦初訳、アリストテレス『詩学』とホラティウス『詩論』の新訳、『ギリシア悲劇全集』『キケロー選集』の編集等で古典文学の普及に果たされた功績も多大である。

先生は永く日本西洋古典学会を支え、また、同学会委員長として学会を指導してこられた。

(大学院文学研究科)

三木 晴男 名誉教授



本学名誉教授三木晴男先生は、3月4日逝去された。享年76。

先生は、昭和20年京都帝国大学理学部地球物理学科を卒業、同学部副手、京都大学理学部講師、助教授を経て、同34年同学部附属阿武山地震観測所教授、同54年同学部附属地震予知観測地域センター教授に就任された。昭和62年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生は、地震学および地球内部物理学が専門で、物性論に基づく地球内部の理論的研究にいち早く着手、地球内部構造論という分野の確立に貢献された。また、地震予知研究では、微小地震観測と観測

網構築に努力されるとともに、広範囲な研究分野に視野を広げ独自の観点から、様々な地震予知の報告に対する検証も行われた。さらに、歴史地震の研究では、地震学だけではなく専門分野を超えて歴史学にも寄与する独創的な研究を完成させられた。

先生はまた、地震学会委員長（現日本地震学会会長）、文部省測地学審議会委員、建設省国土地理院地震予知連絡会委員、東京大学地震研究所地震予知研究協議会委員、京都市防災会議専門委員、(財)地震予知総合研究振興会評議員などを歴任された。

主な著書に『京都大地震』、『検証地震予知』、『小西行長と沈惟敬 - 文禄の役、伏見地震、そして慶長の役』がある。

（大学院理学研究科）

随想

ガラス今昔：光を生かすガラス

名誉教授 作花 濟夫

ガラスは透明で美しい。これが工学部卒業後化学研究所で研究対象として古い材料のガラスを選んだ理由である。1953年のことである。今日、ガラスが、先進技術の光情報化に必須の材料になろうとしていること、その理由の第一がガラスの透明性にあるということは、このとき夢想だにできなかった。

さて、昔のガラスの話であるが、由水常雄著『ガラスの道』によると、古代ガラス器はメソポタミアを中心とする西アジアで初めて作られた。古代ガラス器には水や酒をいれると思われる容器が多い。紀元前1750年頃にメソポタミアで作られた容器が由来のはっきりしている最古のガラス器である。その後技術が伝わって紀元前1500年頃にエジプトでガラス容器が作られ始めた。紀元前1450年頃の作と見られるトトメス三世杯など美しい色の容器が次々と作ら



れ、その後、シリア、ペルシャなど西アジア全体に広がり、ローマンガラスなどとして発展し、後世に伝えられた。ガラス器はほとんどがきれいな色のついたガラスで、ガラスと光の関わりが大きいことを示している。

東大寺の正倉院で見られるガラス器は、千数百年前の昔に無色のガラスも作られていたことを物語っている。この白瑠璃杯と呼ばれるガラス器はシルクロードを通して奈良に到達し、紀元750年頃に正倉院の宝物となったようである。中国語でガラスは玻璃と書かれるが、これは、ガラス器とともにシルクロードを伝わって来た西アジアやエジプトのガラスを意味する言葉のポーリに漢字を当てはめたものらしい。ガラスが中国人の目に光り輝く玉のように映った様子が想像できる。

現在のガラスはどうであろうか。ガラスは私達の生活に溶けこんでいる。街のビル、住宅、電車、自動車の窓ガラスとして、風雨を防ぎ、陽の光を通し

て私達の生活を明るくしている。家では、食器や花瓶の輝きと美しい色が潤いを与えてくれている。

1980年代には、ガラスは先進技術の最前線に躍り出てきた。その最初の例は光通信用のガラスの電話線である。ガラスの電話線とすでに発明されていたレーザー光の組合せによって大量の情報の送れる光通信が始まり、光情報化時代が拓けることとなった。ガラスの透明性が生かされた技術である。ただこの場合の透明度は1cmあるいは10cm光が通るという一般のガラスの透明度とは比べものにならない並外れたもので、50km以上もガラスの中を光が通り抜けるほどである。

光情報化の象徴として究極のコンピューターと言われる光コンピューターを取上げる。電子の代りに光が働くのが光コンピューターである。光コンピューターでは、光によって超多量の情報から役に立つ情報を引きだし、保存し、大量の計算をする。このためには、光の情報を記憶保存する光メモリー、光

の波長を変える変調素子、光の方向を変える偏向素子、光をとめ、進ませ、また光の通路を変えるスイッチ素子が必要であるが、これらすべての素子をガラスで作ることができ、しかも性能が高いことがわかってきた。これらの作用はアクティブな作用といわれるが、これまでガラスに期待されていなかったアクティブな作用を示すガラスが続々と発見されてガラスの役割が大きく広がったといえる。

数千年前の昔から透明性によって賞でられてきたガラス、雨風を防ぎながら光を通して生活を明るくしているガラス、光の電話線として働いているガラス、このようなガラスが将来光コンピューターを作るのに役立つということを記した。

このようにガラスが発展するのを見ることは40年以上ガラスの研究に携わったものにとって喜ばしい限りである。

(さっか すみお 元化学研究所教授

平成6年退官、専門は、無機材料化学・ガラス科学)

資料

平成11年度京都大学後援会助成金交付決定者一覧

京都大学後援会(866ページ参照)が決定した平成11年度第1類(国際交流事業関係)助成金交付決定者は、第1種(派遣)96人、第2種(海外からの学者招へい)17人、第4種(大学行政上の渡航)9人で、それぞれ次のとおりであった。

1. 第1類第1種(海外派遣研究員)

派遣区分		所 属 部 局 等	職名等	氏 名	主な訪問機関・国等	研 究 題 目 等 (国 際 研 究 集 会 等 名)
若 手 研 究 者	長 期	法 学 研 究 科	助教授	中 西 康	パ リ 第 2 大 学 (フ ラ ン ス 共 和 国)	欧州統合過程における国際私法・国際民事手続法の研究
		農 学 研 究 科	助 手	中 田 義 昭	カ セ サ ー ト 大 学 (タ イ 王 国)	タイの経済と農業に関する研究
		情 報 学 研 究 科	助 手	木 庭 啓 介	ウッズホール海洋研究所 (ア メ リ カ 合 衆 国)	陸上生態系における安定同位体比を用いた非攪乱物質循環研究手法の開発、及び生態系生物情報の処理、提供手段についての研究
		人 文 科 学 研 究 所	助 手	森 本 淳 生	近現代テキスト草稿研究所 (フ ラ ン ス 共 和 国)	ポール・ヴァレリーと同時代思想
	国 際 研 究 集 会	理 学 研 究 科	助 手	喜 田 昭 子	連 合 王 国	第18回国際結晶学会議
		理 学 研 究 科	助 手	藤 本 聡	フ ラ ン ス 共 和 国	強相関フェルミン系に関する国際会議
		理 学 研 究 科	助 手	張 秋 梅	ア イ ル ラ ン ド	国際放射線研究会議
		医 学 研 究 科	助 手	木 村 一 志	イ ス ラ エ ル 国	第 5 回 IBRO 神経科学世界会議

派遣区分	所属部局等	職名等	氏 名	主な訪問機関・国等	研 究 題 目 等 (国 際 研 究 集 会 等 名)
若 手 研 究 者	医 学 部 附 属 病 院	助 手	高 橋 淳	ア メ リ カ 合 衆 国	細胞死に関するゴードン研究集会
	工 学 研 究 科	助 手	長 田 孝 二	ア メ リ カ 合 衆 国	第 1 回乱流と剪断流国際シンポジウム
	工 学 研 究 科	助 手	野 村 亮 二	オ ラ ン ダ 王 国	オレフィンメタセシスおよび関連化学の 国際会議
	工 学 研 究 科	助教授	藤 原 健 史	オ ー ス ト ラ リ ア	IAWQ 21世紀に向けての汚泥管理国際会 議
	工 学 研 究 科	講 師	谷 村 省 吾	ア メ リ カ 合 衆 国	ゲージ理論におけるゲージ不変な変数
	人間・環境学研究科	助 手	荒 谷 邦 雄	イ ン ド	第26回国際動物行動学会大会
	人間・環境学研究科	助 手	椎 名 隆	ア メ リ カ 合 衆 国	国際植物学会議
	情 報 学 研 究 科	助 手	十 河 拓 也	中 華 人 民 共 和 国	第14回自動制御国際連盟世界大会
	情 報 学 研 究 科	助 手	吉 村 哲 彦	連 合 王 国	明日の森林技術国際会議
	防 災 研 究 所	助 手	寺 尾 徹	中 華 人 民 共 和 国	第 3 回 GEWEX 国際会議
	防 災 研 究 所	助 手	市 川 温	オ ー ス ト ラ リ ア	第 2 回水資源・環境研究に関する国際会議
	防 災 研 究 所	助 手	武 藤 裕 則	オーストリア共和国	第28回国際水理学会全体会議
	数 理 解 析 研 究 所	助 手	Garrigue, Jacques	ア メ リ カ 合 衆 国	関数型プログラミング国際会議
	原 子 炉 実 験 所	助 手	櫻 井 良 憲	ア イ ル ラ ン ド	第11回国際放射線影響学会
	超高層電波研究センター	助 手	堀之内 武	ア メ リ カ 合 衆 国	第12回大気と海洋の流体力学に関する研 究集会
	理 学 研 究 科	助 手	小笠原 正 道	ア メ リ カ 合 衆 国	アメリカ化学会年会
	理 学 研 究 科	助教授	田 上 高 広	オ ー ス ト ラ リ ア	第 9 回フィッシュン・トラック年代測 定・熱年代学国際会議
	医 学 研 究 科	助 手	北 田 一 博	ア メ リ カ 合 衆 国	第13回国際マウスゲノム会議
	工 学 研 究 科	助 手	中 建 介	中 華 人 民 共 和 国	第 6 回太平洋高分子会議
	農 学 研 究 科	助 手	木 岡 紀 幸	ア メ リ カ 合 衆 国	キーストーンシンポジウム
	工 学 研 究 科	助教授	石 森 浩一郎	ア メ リ カ 合 衆 国	ゴードン国際会議「生体金属」
	農 学 研 究 科	助 手	吉 永 郁 生	オ ー ス ト ラ リ ア	有害藻類ブルームに関する第 9 回国際会議
	ウ イ ル ス 研 究 所	助 手	大 里 元 美	ア メ リ カ 合 衆 国	ラントドメイン会議
	工 学 研 究 科	博士後期2年	吉 野 正 人	ア メ リ カ 合 衆 国	第 3 回アメリカ 日本機械学会流体工学 合同会議
	情 報 学 研 究 科	博士後期1年	王 輝 宇	中 華 人 民 共 和 国	第14回自動制御国際連盟世界大会
	原 子 炉 実 験 所	博士後期1年	春 木 理 恵	ドイッ連邦共和国	メスパウアー効果の応用国際会議1999
	文 学 研 究 科	博士後期3年	矢 橋 知 枝	ア イ ル ラ ン ド	第34回国際英語教育専門家国際協会年次 会議
	経 済 学 研 究 科	博士後期3年	徳 丸 宜 穂	チ エ コ 共 和 国	欧州進化経済学会1999大会

派遣区分		所属部局等	職名等	氏 名	主な訪問機関・国等	研 究 題 目 等 (国 際 研 究 集 会 等 名)
若 手 研 究 者	国 際 研 究 集 会	工 学 研 究 科	博士後期3年	Jens F. Eschenbacher	中 華 人 民 共 和 国	21世紀におけるエネルギー環境シンポジウム
		化 学 研 究 所	博士後期3年	桑 原 和 弘	ア メ リ カ 合 衆 国	アメリカ化学年次大会
		防 災 研 究 所	博士後期3年	高 島 正 典	ニ ュ ー ジ ー ラ ン ド	第12回世界地震工学会議
		文 学 研 究 科	博士後期1年	林 のぞみ	ア イ ル ラ ン ド	第34回国際英語教育学会年次会議
		工 学 研 究 科	博士後期3年	松 見 紀 佳	中 華 人 民 共 和 国	第6回環太平洋高分子化学国際会議
		農 学 研 究 科	博士後期1年	西 谷 豪	オ ー ス ト ラ リ ア	有害藻類ブルームに関する第9回国際会議
	フ ィ ー ル ド ワ ー ク	原 子 炉 実 験 所	助 手	日 野 正 裕	ア メ リ カ 合 衆 国	弾力超冷中性子源の開発と偏極中性子のベータ崩壊における非対称性に関する研究
		総 合 人 間 学 部	博士後期1年	山 口 威	フ ラ ン ス 共 和 国 ベ ル ギ ー 王 国	シャルル・ボードレルの『哀れなベルギー』に関する研究
		教 育 学 研 究 科	博士後期2年	秦 真理子	オ ー ス ト ラ リ ア	箱庭制作過程に関する研究
		工 学 研 究 科	博士後期1年	小 坂 浩 司	ア メ リ カ 合 衆 国	オゾンを用いた促進酸化処理による水処理技術の開発に関する実地調査
		人 間・環 境 学 研 究 科	博士後期1年	池 亀 彩	イ ン ド	南インドにおける文化遺産の創出
		ア ジ ア・ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科	博士後期2年	佐 藤 尚 子	タ ン ザ ニ ア 連 合 共 和 国	アフリカの多言語社会における民族語継承に関する研究
		東 南 ア ジ ア 研 究 セ ン タ ー	博士後期3年	島 上 宗 子	イ ン ド ネ シ ア 共 和 国	「改革の時代」におけるジャワ農村 政府と村落社会の関係に関する動態的研究
		文 学 研 究 科	博士後期1年	福 浦 一 男	フ ラ ン ス 共 和 国	フランス在住西アフリカ系移民の社会動態
		工 学 研 究 科	博士後期3年	高 橋 栄 人	ア メ リ カ 合 衆 国 ド イ ツ 連 邦 共 和 国	建設プロジェクト組織の編成に関する研究 専門家における職能の現代的意義の考察から
		情 報 学 研 究 科	博士後期2年	劉 晨	中 華 人 民 共 和 国	中国における資源・環境保全型肉牛生産システムの構築に関する研究
		人 間・環 境 学 研 究 科	博士後期1年	岩 谷 彩 子	イ ン ド	南インドの半定住民ヴァガリのキリスト教への「改宗」と「夢」
		工 学 研 究 科	博士後期3年	Chong Hon Shyan	マ レ ー シ ア シ ン ガ ポ ー ル 共 和 国	東南アジアにおけるショップハウスの地域社会・経済連関に関する研究
		農 学 研 究 科	博士後期3年	山 根 裕 子	タ ン ザ ニ ア 連 合 共 和 国	持続型の肥料としてのVA菌根菌のタンザニアの抵投入型農業への導入の試み
	1 ヵ 月	総 合 人 間 学 部	助教授	服 部 文 昭	ヘルシンキ大学 (フィンランド共和国)	非スラブ語圏におけるロシア・スラブ研究について
		理 学 研 究 科	助教授	杉 山 直	マックスプランク研究所 (ドイツ連邦共和国)	宇宙の再加熱と宇宙マイクロ波背景放射
		工 学 研 究 科	助教授	大 嶋 正 裕	カナダ国立研究所 (カ ナ ダ)	CO ₂ 可圧下でのポリプロピレンの結晶化速度の超音波センサーによる解析ならびに発砲シュミレータの開発に関する研究
		工 学 研 究 科	助教授	藤 井 栄	テキサス大学 (アメリカ合衆国)	鉄筋コンクリート柱・梁接合部の耐震性能評価に関する研究
		人 間・環 境 学 研 究 科	教 授	後 藤 喬 雄	ヘルシンキ工科大学等 (フィンランド共和国等)	核磁気共鳴によるナノクラスター磁性体の量子トンネル効果の研究
		再 生 医 科 学 研 究 所	助教授	宮 本 正 章	マイアミ大学 (アメリカ合衆国)	臨床膵島移植、バイオ人工膵応用の現況に関する調査研究
		食 糧 科 学 研 究 所	助教授	福 岡 伸 一	チューリヒ大学等 (ス イ ス 連 邦 等)	プリオン病原体の経口侵入ルートに関する研究

派遣区分	所属部局等	職名等	氏 名	主な訪問機関・国等	研 究 題 目 等 (国 際 研 究 集 会 等 名)
1 ヶ月	総 合 人 間 学 部	教 授	村 形 明 子	シ カ ゴ 大 学 等 (ア メ リ カ 合 衆 国)	文化財と国際環境 山中商会、松本文恭 関係文書を中心に
	総 合 人 間 学 部	助 手	内 藤 栄 一	カロリンスカ研究所 (スウェーデン王国)	陽電子放射型断層撮像法 (PET) を用い た運動遂行と運動錯覚に關与するヒトの 脳内部位の同定
	理 学 研 究 科	助 手	西 亮 一	アルチェトリ天文台 (イ タ リ ア 共 和 国)	First Luminous Objects の形成に關する 研究
	人 文 科 学 研 究 所	助 手	高 田 京比子	パドヴァ大学等 (イ タ リ ア 共 和 国)	14世紀 15世紀初におけるヴェネツィア 市民の家産運営と都市国家の財政
	経 済 研 究 所	教 授	岡 田 章	アムステルダム大学 (オ ラ ン ダ 王 国)	グループ形成における戦略的行動の国際 比較に關する研究
	経 済 研 究 所	講 師	村 澤 康 友	ペンシルベニア大学 (ア メ リ カ 合 衆 国)	景気循環の時系列因子分析
3 ヶ月	総 合 人 間 学 部	教 授	松 島 征	マルヌ・ラ・ヴァレー大学等 (フ ラ ン ス 共 和 国 等)	ヨーロッパ民族文化ならびに文化記号論 に關する研究
	理 学 研 究 科	助 手	佐 藤 薫	ノースウエスト研究所 (ア メ リ カ 合 衆 国)	対流圏及び成層圏の力学と物質輸送に關 する研究
	医 学 研 究 科	助 手	鍋 島 紀 滋	クィーンエリザベス病院 (連 合 王 国)	肝移植に關する研究
	ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科	助教授	東 長 靖	オックスフォードイスラム研究センター (連 合 王 国)	イスラーム神秘主義思想と社会運動に關 する研究
留学派遣	工 学 部	4 回生	吉 元 健 治	ウィスコンシン大学 (ア メ リ カ 合 衆 国)	[部局間協定校]
	工 学 部	4 回生	加 藤 幹 生	ウォータールー大学 (カ ナ ダ)	"
	農 学 部	3 回生	小野田 典 子	ウプサラ大学 (スウェーデン王国)	[大学間協定校]
	農 学 部	3 回生	山 本 友 紀	トロント大学 (カ ナ ダ)	"
	総 合 人 間 学 部	4 回生	小 林 幸 帆	ベルリン自由大学 (ドイツ連邦共和国)	"
	総 合 人 間 学 部	4 回生	權 田 容 子	カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (ア メ リ カ 合 衆 国)	"
	文 学 研 究 科	博士後期2年	赤 羽 律	ウィーン大学 (オーストリア共和国)	"
	法 学 部	4 回生	山 崎 潤	カリフォルニア大学リバーサイド校 (ア メ リ カ 合 衆 国)	"
	法 学 部	2 回生	昇 正 剛	メルボルン大学 (オーストラリア)	"
	法 学 部	3 回生	大 槻 佑 子	タフツ大学 (ア メ リ カ 合 衆 国)	"
	理 学 部	3 回生	原 ひでみ	カリフォルニア大学サンディエゴ校 (ア メ リ カ 合 衆 国)	"
	工 学 研 究 科	修士課程1年	霜 鳥 勉	ウィスコンシン大学 (ア メ リ カ 合 衆 国)	[部局間協定校]
	工 学 研 究 科	修士課程1年	若 公 崇 敏	ウォータールー大学 (カ ナ ダ)	"
	工 学 研 究 科	修士課程1年	庄 司 靖 章	ウォータールー大学 (カ ナ ダ)	"
	工 学 研 究 科	修士課程1年	花 谷 慎太郎	ウォータールー大学 (カ ナ ダ)	"
	工 学 研 究 科	修士課程1年	中 嶋 裕 信	ウォータールー大学 (カ ナ ダ)	"

派遣区分	所属部局等	職名等	氏 名	主な訪問機関・国等	研 究 題 目 等 (国 際 研 究 集 会 等 名)
留学派遣	人間・環境学研究科	博士後期2年	安 藤 知 里	ミュンヘン大学 (ドイツ連邦共和国)	[大学間協定校]
	人間・環境学研究科	博士後期3年	梁 根 千夏子	フンボルト大学 (ドイツ連邦共和国)	"
	人間・環境学研究科	博士後期3年	黒 谷 茂 宏	ベルリン自由大学 (ドイツ連邦共和国)	"
研修派遣	工学部建築学専攻	文部技官	吉 田 亘 利	ラトガース大学 (アメリカ合衆国)	実験技術の習得, 数値解析プログラムの理解・運用に関する研修
	化学研究所附属 原子核科学研究施設	文部技官	頓 宮 拓	The CERN Accelerator School (デンマーク王国)	加速器における超高真空技術に関する研修
	防災研究所 附属地震予知研究センター	文部技官	中 尾 節 郎	フィリピン火山地震研究所 (フィリピン共和国)	地震予知研究のデータ解析及び観測機器の保守管理に関する研修
	工学研究科	文部技官	杉 山 文 子	オックスフォード大学等 (連 合 王 国)	先進複合材の強度測定法, 特に衝撃強度の測定法及び解析方法に関する研修
	附属図書館	文部事務官	後 藤 慶 太	ハーバード大学等 (アメリカ合衆国)	電子図書館プロジェクトに関する研修

2. 第1類第2種(海外からの学者招へい)

区 分	受 入 部 局	招へい学者名	国(地域)名・所属機関・職名	研 究 題 目
若 手 研究者	総合人間学部	馮 憲	中華人民共和国・中国科学院上海光学精密機械研究所・研究員	希土類レーザガラスに関する研究
	エネルギー科学研究科	Liu Chuncheng	中華人民共和国・清華大学・教師	相変態を伴う過程の変態・熱・力学的研究とくに、材料組織の効果を考慮した解析コードの開発に関する研究
	原子炉実験所	郭 玉 君	中華人民共和国・西安交通大学・助教授	ポスト DNB 熱伝達に関する研究
一 般	文学研究科	Rajmund Mydel	ポーランド共和国・ジャギロニアン大学・教授	歴史的都市の空間構造に関する日本・中国・ポーランドの比較研究
	理学研究科	Oleksandr Magner	ウクライナ共和国・ウクライナ国立科学アカデミー原子核研究所・主任研究員	超変形シエル構造の起源に関する共同研究
	理学研究科	C.Cohen-Tannoudji	フランス共和国・College de France 及び高等師範学校・教授	レーザーによる原子の冷却・トラッピングに関する特別講演ならびに特別講義
	医学研究科	申 宰 昊	大韓民国・韓国食品・医薬品安全局国立毒性学研究所・研究員	化学物質によって誘導された形態異常の分子メカニズムに関する研究
	医学研究科	Ii-sei Watanabe	ブラジル連邦共和国・サンパウロ大学・教授	機械受容体の再生と形態維持機構に対する成長因子の役割
	工学研究科	Thorsten Bach	ドイツ連邦共和国・マールブルグフィリップス大学・教授	光誘導型ラジカル生成を利用した高立体選択的合成反応に関する研究
	工学研究科	Robert Law Wardlaw	カナダ・カナダ国立研究所・特別顧問	橋梁構造物の動的空力挙動と次世代の耐風設計に関する研究
	人文科学研究科	Oliver James Moore	オランダ王国・ライデン大学中国学研究所・講師	敦煌出土考古遺物の研究
	経済研究所	Martin J. Osborne	カナダ・マクマスター大学・教授	限定合理性と政治経済モデルのゲーム分析に関する研究
	化学研究所	Marek Banasik	ポーランド共和国・ポーランド科学アカデミー環境工学研究所・助教授	心筋梗塞治療薬としてのポリ(ADP リボース)阻害剤に関する研究
	化学研究所	Silviu Olariu	ルーマニア・物理学原子核工学研究所・上級研究員	遷移金属元素におけるスピン交換相互作用に関する研究
国 際 共 同 研 究	化学研究所	Lech T. Baczewski	ポーランド共和国・国立物理学研究所・部長	金属超薄膜における磁気結合
	化学研究所	曹 培 林 外 1 名	中華人民共和国・浙江大学・教授	密度汎関数分子軌道法を分子動力法に適用した固体表面過程の研究

3. 第1類第4種(大学行政上の渡航及び大学間協定校との交流)

所属・職名	氏 名	渡航目的国 (地 域 名)	主 な 訪 問 機 関	派 遣 目 的
総 長	長尾 真	大 韓 民 国	慶北大学校	本学の協定校である慶北大学校における53周年記念式典及び記念シンポジウム出席
総 務 部 総 務 課 秘 書 掛 長	野中 定雄	大 韓 民 国	慶北大学校	京都大学総長に随行し、本学の協定校である慶北大学校における53周年記念式典及び記念シンポジウム出席
総 長	長尾 真	連 合 王 国	ノッティンガム大学 ケンブリッジ大学 オックスフォード大学等	ノッティンガム大学との学術交流協定の締結、及びケンブリッジ大学並びにオックスフォード大学等における高等教育・学術交流に関する調査
工 学 研 究 科 教 授	鈴木健二郎	連 合 王 国	ノッティンガム大学 ケンブリッジ大学 オックスフォード大学等	京都大学総長に随行し、ノッティンガム大学との学術交流協定の締結、及びケンブリッジ大学並びにオックスフォード大学等における高等教育・学術交流に関する調査
総 長	長尾 真	ニュージーランド オーストラリア	オークランド大学 シドニー大学 オーストラリア国立大学	オークランド大学で開催の「APRU 年次会議」出席及びシドニー大学並びにオーストラリア国立大学における高等教育・学術交流に関する調査
経 済 研 究 所 教 授	森棟 公夫	ニュージーランド オーストラリア	オークランド大学 シドニー大学 オーストラリア国立大学	京都大学総長に随行し、オークランド大学で開催の「APRU 年次会議」出席及びシドニー大学並びにオーストラリア国立大学における高等教育・学術交流に関する調査
留学生センター 助 教 授	青谷 正妥	中華人民共和国	BEIJIN CONTINENTAL GRAND HOTEL, HUA TING HOTEL&TOWERS	日本留学フェア参加
工 学 研 究 科 教 授	鈴木健二郎	台 湾	台湾大学	台湾大学で開催の「第5回 AEARU 総会」出席及び高等教育・学術交流に関する調査
文 学 研 究 科 教 授	徳永 宗雄	台 湾	台湾大学	台湾大学で開催の「第5回 AEARU 総会」出席及び高等教育・学術交流に関する調査

公開講座

京都大学春秋講義（春季講座）

本学では、財団法人京都大学教育研究振興財団（866ページ参照）の助成を得て、下記のとおり平成12年度「京都大学春秋講義（春季講座）」を開講します。

記

会 場 法経第二教室

時 間 午後6時30分～8時

開講日程

月曜講義（5回シリーズ） テーマ『学術の動向と新たな展開 新世紀への展望』

開 講 日	講 師 名	テ ー マ
5月15日	理 学 研 究 科 教 授 柴田 一成	活動する宇宙
5月22日	アジア・アフリカ地域研究研究科 教 授 掛谷 誠	アフリカ地域研究と国際協力
5月29日	生 命 科 学 研 究 科 教 授 中西 重忠	脳の機能としくみ
6月5日	食 糧 科 学 研 究 所 教 授 村田 幸作	21世紀に何を食べるか 遺伝子組換え食品
6月12日	文 学 研 究 科 助教授 水谷 雅彦	電子ネットワーク時代の情報倫理学

水曜講義

開 講 日	講 師 名	テ ー マ
5月17日	防 災 研 究 所 教 授 林 春男	震災復興と生活再建
5月24日	法 学 研 究 科 教 授 初宿 正典	情報公開と個人情報保護
5月31日	文 学 研 究 科 教 授 上原 真人	瓦屋根の風景
6月7日	医 学 研 究 科 教 授 一山 智	もう一度 結核をみなおそう
6月14日	農 学 研 究 科 教 授 上野 民夫	植物保護と化学技術 その光と影

受講定員 180人（本学受講者の定員枠30人）

受講資格 特に問いません。

受 講 料 無 料

申込方法 本学教職員及び学生が受講を希望する場合は、所属部局の事務担当へお申し込みください。

申込締切日 5月8日（月）

問い合わせ先 研究協力部研究協力課（TEL 075-753-2041）

終了報告

教育学研究科附属臨床教育実践研究センター
第3回リカレント教育講座 「心の教育」を考える
- 不登校・学級崩壊の心理臨床から -

学校教育現場での教育相談従事者を対象に専門的な研修を行う本講座も、今回で3回目を迎えた。今回は、増え続ける不登校に加えて近年大きな問題となっている学級崩壊をテーマに取り上げたが、反響が非常に大きく、申込数が定員を大幅に上回ったため、定員を増員して対応した。当日は、現職教諭・教育センター職員・スクールカウンセラーらを中心に120人が参加。参加者の実際の経験に基づく事例研究と、臨床心理学や教育社会学など多様な側面から学級崩壊を考えるシンポジウムが行われ、活発な討論が展開された。

日時・講師等は以下のとおり。

2月18日（金） 13：00～17：00

事例研究

「不登校・学級崩壊等の個別の事例から学ぶ」

講師 第1分科会

鵜養 美昭（日本女子大学教授）

東山 紘久（京都大学教授）

第2分科会

砂田 良一（金沢大学教授）

伊藤 良子（京都大学教授）

第3分科会

徳田 仁子（札幌国際大学短期大学部助教授）

岡田 康伸（京都大学教授）

第4分科会

山中 康裕（京都大学教授）

藤原 勝紀（京都大学教授）

2月19日（土） 9：00～12：00

シンポジウム

「学級崩壊を考える」

シンポジスト

「学級崩壊と教師」

近藤 邦夫 （東京大学教授）

「学級崩壊の実態とその背景」

松浦 善満 （和歌山大学教授）

「学級崩壊とスクールカウンセラー」

鵜養 美昭（日本女子大学教授）

指定討論者 山中 康裕 （京都大学教授）

司 会 藤原 勝紀 （京都大学教授）

（大学院教育学研究科）

話題

長尾総長が課外活動団体を激励

2月28日（月）の昼休み、長尾 真総長は課外活動で活躍してきた学生団体及び平成11年度に優秀な成績を収めた個人やクラブの代表11人を招待し、これまでの活動を称えとともに、今後の活躍を激励した。これは今回、初めて企画されたものである。

今回の激励会には、入学式や卒業式で学歌等を演奏している音楽部交響楽団の総務、幾多の輝かしい戦績を残してきたアメリカンフットボール部の主将、昨年の全日本学生フィールドアーチェリー選手権大会で優勝し京都市スポーツ大賞を受賞したアーチェリー部の選手、関西アンサンブルコンテスト（大学の部）のサクソホーン四重奏で今年の関西代



表に選出された吹奏楽団部員など、文化系5団体（応援団、音楽部交響楽団、吹奏楽団、将棋部、囲碁部）、体育系6団体（アメリカンフットボール部、

アーチェリー部，ウインドサーフィン部，相撲部，ライフル射撃部，陸上競技部）の学生が出席した。

長尾総長が，学生一人一人に気さくにクラブ活動や競技のことなどについて質問し，また，元体育会会長でもあった宮崎 昭副学長の豊富な話題も加わ

り，はじめは緊張ぎみであった学生もしだいにほぐれ，学生からは，総長自筆の「捲土重来」をユニホームに縫い込みたい，課外活動施設を改修してほしいなど，種々の要望が出され，終始，爽やかで和やかな激励会となった。

京大病院で『春・ほのぼのコンサート』を開催

京大病院では，3月17日（金）夕方，『春・ほのぼのコンサート』を，新装になった新外来棟アトリウムホール1階フロアーに特設ステージを設け開催した。

コンサートは，本田孔土病院長の挨拶に始まり，院内学級児童生徒による歌と演奏，院内ボランティアグループ「あんさんぶるブンブン」によるコーラス，本学音楽部交響楽団有志による弦楽四重奏など多彩な出演者，盛り沢山のプログラム内容で実施された。

この間，参加者みんなで合唱する曲も加えられ，吹き抜けのアトリウムホールの2階，3階からの立ち見も含め，入院患者さん約300人から盛んな拍手が送られていた。

このコンサートは，入院患者さんへ“憩いのひととき”を提供するため，平成7年から毎年，事務部，看護部による実行委員会が企画している手作りのイベントで，京大病院の恒例行事となっている。

（医学部附属病院）



プログラム

1. 院内学級児童生徒による歌と演奏

—京都市立桃陽養護学校 京大病院分教室—
♪森のくまさん ♯そのままの君で ♭Believe

2. コーラス

—アンサンブル ふんぶん—
♪歌の翼 ♯椰子の実 ♭アヴェマリア
♪サンタルチア ♯見上げてごらん夜の星を

3. 弦楽四重奏

—京都大学交響楽団有志—
♪荒城の月 ♯浜辺の歌 ♭アイネ クライネ ナハトムジーク

上演日：平成12年3月17日（金）

開演時間：16：30

お知らせ

財団法人京都大学後援会の寄附行為の一部改正

平成12年3月1日付けで財団法人京都大学後援会の寄附行為の一部が改正され，財団法人の名称が，「京都大学後援会」から「京都大学教育研究振興財団」に改められた。